

念仏は行者のために、非行非善なり。わがはからいにて行ずるにあらざれば、非行という。わがはからいにてつくる善にもあらざれば、非善という。ひとえに他力にして、自力をはなれたるゆえに、行者のためには非行非善なりと云々。

第2組 清浄寺住職

第8章 聞名の道

波佐谷 宏昭

text by Hiroaki Hasatani

はじめに

この第八章では、私たちが念仏申すことは、私の修める行ではなく、私が励む善根でもないと言われます。実際には、念仏するのは私であり、念仏申すことは、善い行為であります。ここでは、念仏は、念仏を申すものにとって、行ではなく、善でもないと言われているのです。その理由は、自分の「はからい」によって行ずるのではないから、私の行ではない。わたしの「はからい」で修める善ではないから、私の善ではないと言われます。

わがはからい

「わがはからい」というのは、私たちの思い計らい、分別です。私たちは感知したあらゆるものを、「役に立つ、役に立たない」「損だ得だ」「意味がある、意味が無い」などと、自分なりに意味づけしていきます。そして、その分別の根っこには、つねに自分を立てて、自分を大きくして、自分を守ろうする我執があります。それゆえに、念仏するということを「わがはからい」でとらえていくとき、念仏そのものが、自分を立てて、自分を大きくして、自分を守るための行として受け止められていきます。そのような念仏であるならば、ただ自分の思いを拡大していくという迷いの生活を少しも超えることはありません。

聞名の道

親鸞聖人が、法然上人から学ばれた仏道は、「ただ念仏して弥陀にたすけられ

まいらすべし」という言葉で表されていますように、「ただ念仏」という道であります。親鸞聖人は、

「ただ念仏」という教えの原意を尋ねて『無量寿経』を詳細に学ばれていますが、『無量寿経』には、口称念仏を仏道として明確に語る経文は存在せず、仏道として繰り返し説き明かされているのは「聞具名号」「聞我名字」という言葉で語られる「聞名の道」でありました。親鸞聖人は『無量寿経』の意を受けて、「称名」はそのまま、阿弥陀仏の願いを聞く「聞名」であることを明らかにしていきます。

『一念多念文意』には、

称は御なをとなうるとなり。また、称は、はかりというところなり。はかり
というは、もののほどをさだめることなり。 (聖典545頁)

と明かされています。「称」とは「秤」に通じて「はかる」ということ、ものの中身、内実をはっきり知るということ、つまり、称名とは、仏の呼び声を聞く、仏の内実である慈悲と智慧を深く知ることだといわれているのです。そして、その文に続けて

名号を称すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念
もなければ、実報土へうまるともうすところなり。 (聖典545頁)

と明かされます。称名念仏を十声一声することは、そのまま、名号を聞くということだと言われているのです。称名は、私が仏の名を称えるということですが、私の称名を、そのまま仏の呼び声として聞いていくことなのです。

ひとえに他力による

私が念仏を申す身になったということは、私が念仏申すことに先だって、私に南無阿弥陀仏が届けられていたという事実があります。自我の殻の中で、あるがままを失い、一人一人の存在の重さを見失っている私たちに、真如（あるがまま、真理そのもの）が、目覚めを促し続けている。それが南無阿弥陀仏という呼び声です。称名念仏は、私の称える念仏ではありますが、ひとえに仏のはたらきかけによって成り立つものであります。そういう意味において、私の修める行ではなく、善でもないということなのでしょう。